

序文

一九九七年一月に死去したアルフレッド・ジェルは、同世代の社会人類学者のなかで最も才気あふれる一人として広く知られていた。彼の著述と思考は、厳密に分析的でありながら、しばしば遊び心に溢れ、挑発的だったし、彼は同様に、社会理論の最も一般的なものもろの論争点にも、最も難解な儀礼の諸要素や諸実践や諸人工物にも、巧みに取り組んだ。この本はこれらの能力を例証するものであり、これは芸術の人類学という研究領域が拓かれて以来、最も根源的な再考となっているだろう。この本は、たくさんの抽象モデルの構築と、特定の芸術対象物たちや芸術の諸形式に坎んする驚くべき洞察に満

ちたもろもろの議論を確実に結合させている。

とはいえ、この本は明快かつ率直な方法で書かれているにもかかわらず、必ずしも容易に理解されるような本ではない。もし著者がもっと生きることができていたら、彼はきっとこの仕事にさらに手を加えていただろうし、彼は現に、時間がなかったために取り組めなかった改稿のためのメモを残していた。我々が手にしているのは、一冊の本の完全な草稿であり、その大部分はわずか一カ月間で書かれたため、それは完璧に洗練されたヴァージョンではない。けれども、アルフレッド・ジェルのもろもろの論文と著作は、ほとんどの場合、整った形で

現れており、彼は激しい強度で書いたが、彼は自分の考えを始めから終わりまではっきりと練り上げてから書くことを好んでいた。したがって、この本はほぼ意図された最終形態であると言うことができるが、それが洗練を欠くのは事実であり、ジェルがその機会を与えられていたなら、修正されたであろう強引な諸節や、追加されたり精緻化されたであろう諸論点や、全体によりよく統合されたであろう諸部分を含む。

この本にとりわけ欠けているのは、全体の議論を簡潔に示す一つの序文あるいは厳密な意味での序論だ。私は他の研究者の本を要約することに躊躇を覚えるし、そして率直なところ、一つの複雑で込み入った議論の多様な諸次元を正しく評価する能力が自分にあるのか自信がない一方で、以下につづくもろもろの議論を、特にアルフレッド・ジュルの他の著作に馴染みのない読者たちに、より近づきやすいものにするところこそ、この序文が試みるべきことだと確信している。この本は一群の論稿の上に構築されており、「魅惑の技術と技術の魅惑」(1924)、「ヴォーゲルの網——芸術作品としての罫と、罫としての芸術作品」(1906)、あるいはジェルのポリネシアのイレズミにかんする研究『像たちで包む』

(1903)を読んだことのある人類学者たちは、この本が向かう方向を予期するだろう。

「魅惑の技術」にかんする論稿は、とりわけ、ここにおけるいくつかの大きな議論を予示している。その論文でジェルは、芸術の人類学は、宗教における神学に匹敵する芸術における美学的な鑑賞のプロジェクトから自らを分離することができなかったため、今までのところどこにも行き着いていない、と挑発的に主張した。彼は、もしこの学問分野が、そうするのではなく、宗教の社会学と同様の立場をとるなら、社会学の方法論的無神論と同等の、方法論的俗物主義が必要であると論じた。このことは、教養ある中産階級の知識人である人類学者たちが一般に支持している「芸術崇拜」^{アート・カルト}の放棄を要求した。だがこのことは、脱神話化する社会学的な分析——それは階級文化を維持する、あるいは支配的なイデオロギーを正当化する芸術の役割を同定するだろう——を提唱するものではなかった。つまり、このような類の接近方法では、芸術対象物たちそれ自体に取り組むことも、それらの特異性と効力に取り組むこともできないとジェルは示唆したのだった。それにもまして、彼は芸術界の諸制度が提起するもろもろの問いには比較的に無関心であり、

それよりも、芸術の人類学は、芸術の働き一般に取り組むべきであると信じていた。

彼は、芸術を一つの技術の特殊な形態として捉えることによって、とりわけ芸術対象物たちを、「もろもろの意図性のネットワークの中で網の目に絡まった諸個人から黙諾を手に入れるための」(1920: 43) もろもろの装置とみなすことによって、これらの対象物たちの魅惑とアウラに屈することなく、芸術対象物の効力についての諸問題を問うことが可能なのだと提案したのであった。たとえば、(パプアニューギニア、マッシュム地方の) トロリアンドの舳先板たちのような、鮮やかに内旋し、とりこにする諸形態は、一つの競争的な交換の場において、ある種の心理戦を仕掛ける。これらの板たちは、交換相手のホストたちと対峙し、理想的には彼らを眩惑し、彼らを魅了し、彼らを混乱させ、彼らがもろもろの貴重財——人類学の有名なクラの貝貨たち——を、それらよりも価値の低いもののために引き渡すよう仕向ける。けれどもこの主張は還元主義ではなく、つまりある意味においてその対象物がそれ自体で、この場合はその制作にかかわったことが知られている呪術的な卓越でその人工物を包むというもろもろの期待と了解の一領野から独立し

て、これをしている、もしくはこれをするだろうと言うのではない。技術は魅惑されているから、技術はかろうじて理解可能な名人芸の何らかの過程の結果であるから、それは魅惑するのであって、このことは、他の諸領域において人々が実現を目指して苦闘する呪術的な効力の一つの理想を典型的に示している。

一九九二年の論稿には一つのマイナーな不整合があり、それは、芸術の人類学が「未開」芸術(ジェルは、「非西洋」芸術という婉曲的な術語を、それが正典的な部族芸術の形態とはまったく異なった社会的な位置づけをもつ高尚な東洋芸術その他の諸伝統を含むとの理由から拒否した)の研究でありつづけると想定されているように見える、という意味においてであった。けれども、彼が芸術対象物たちの「技術的困難さから生じる光輪効果」とその他の諸側面について言及し、つづいて取り上げた諸事例は、アメリカの幻想画家J・F・ペトおよびピカソの絵画を含んでいた。彼の理論は、特定の諸集団について想定される特質にかなう理論であるよりも、それどころかすべての芸術のもろもろの作用にかなう理論であるかもしれないというこの含意こそが、この本の一つの前提なのだ。